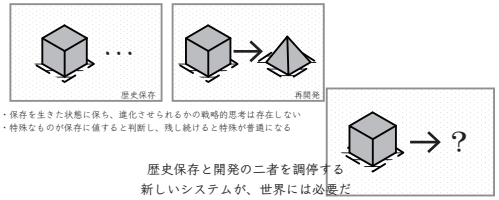
保存から継承へ

- 関係性の構造を引き継ぐ通時的な建築 -

01| 背景と目的

研究背景

私が建築を志したのは、小学校時代の遊び場である商店街がシャッター街になり、それをもう一度活気づけたいと考えたからだ。しかし、私の原風景は再開発される見込みとなり、鋼鉄なビルになるようだ。経済の波に完全に抗えないことは分かっているが、誰かの原風景を少しずつ残しながら、**建築を更新していくことはできないのだろうか。**



・保存を生きた状態に保ち、進化させられるかの戦略的思考は存在しない
・特殊なものが保存に値すると判断し、残し続けると特殊が普遍になる

歴史保存と開発の二者を調停する
新しいシステムが、世界には必要だ

クロノカオス

建築にとっての意味がまだ理論的に解明されていない二つの状況が、見事に交差しようとしている。一つに「歴史保存」しようとする気運があること。もう一つは、戦後建築の存在を消そうという動きがあること。歴史保存と解体の衝撃的な同時進行ぶりは、時間が線的に進化するという認識を打ち砕く。

本研究の目的

時間的に更新されていく**通時的な建築の定義**

新しいシステムとしての**建築継承方法の確立**

02| 共時的な建築と通時的な建築

ソシュールと時間的概念

スイスの言語学者、記号学者、哲学者であるフェルディナン・ド・ソシュールは、学問における言語学の時間的概念の見方として、共時態 , 通時態を打ち立てた。時間の軸上の一定の面における状態を共時態と呼び, 時代の移り変わるさまざまな段階で記述された共時的断面と断面を比較し、時間的な変化を辿った価値の変動状態が通時態である。ソシュールが言語学で打ち立てた共時態、通時態の概念は、ソシュール自身が言語学というフィールドでは共時態が優先されるべきと主張しているが、この共時態と通時態という時間的概念の考え方は様々な学問領域に汎用可能であると考えられる。建築学もその一つである。

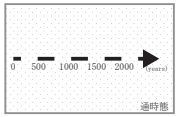
時間的な概念における建築

建築は土地の上に建造物を建てる以上、否応なしにどこに建てるかという場所性が存在する。場所性として、建築と密接に関連しているのは風土とのかかわりである。世界中の建物は風土を考えて、風土と共生するように建築を作っている。またそれらは風土と共生することをしつつ、現在の技術や考え方も取り入れながら建築を建てている。このように、人間の生活を考えるうえでも建築というのは風土や歴史に根差したものであるべきだ。また、このように風土を理解し過去から未来へ建築を継承しているものを通時的なものと考えられ、建築は少しずつ更新されていくべきである。

建築に通時態、共時態の時間的概念を取り入れる

通時態

時代の流れとして見る考え方



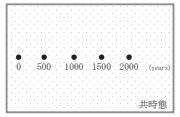
通時的な建築

建築や都市の歴史を引き継いでいる、かつ人の介在している建築であること
(線としての動的な建築)

→ **時が流れている建築**

共時態

瞬間や時代に焦点を当てた考え方

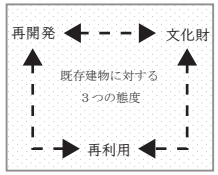


共時的な建築

建築や都市の歴史を引き継いでいない、あるいは人の介在しない建築であること
(点としての静的な建築)

→ **時が止まっている建築**

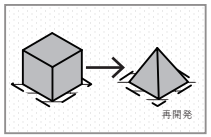
03| 既存建築物への対応



【時が作る建築 - リノベーションの西洋建築史 -】
加藤によれば、これまでの建築家が既存建築物への対応は３つに分けられる。一つに、十九世紀から二十世紀の圧倒的な成長時代において、既存建築に対する態度として大勢を占めていた「再開発」、次に再開発のような経済原理主義に対抗して、歴史的な建築が経済的価値観の荒波に揉まれ海の藻屑として消え去ることに歯止めをかけようとした「保存」であり、自らを正当化する経済原理に対抗する方便としての「文化財」、最後に 20 世紀末にリノベーションの流行とともに再来した「再利用」

再開発

世界や都市の変化が圧倒的な速度で進んでいた時代、時を経て古くさくなり、時代に合わなく使いにくいとされてきた建物は「破壊して、新築する」という手法によって、消し去られてしまった。この再開発という手法は、さらなる発展、開発、成長を求める「近代の精神」を体現していた。



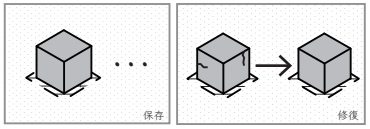
十六世紀、そして十九世紀から二十世紀、そして現在行われている再開発、それらの信念は「過去からの脱却」である。十六世紀は高密度に立ち並んだ雑多な都市住宅から直線道路や広場などの整理された都市へ、現在の日本も戦前から、あるいは戦後の高度経済成長期における特徴的な都市から経済原理的で扱いやすい都市へ、どちらも古くなったものを捨て新しい価値観を取得するという信念を持つ。つまり、過去からの脱却、未来への創造である。

破壊して、新築する

→ **共時的な建築の考え方**

文化財

経済至上主義による再開発への波に対して歯止めをかけることとなったのが、十九世紀における「保存」である。「保存」は再開発に対抗する概念として「文化財」を生み出した。つまり、歴史的建築は人類が受け継いだ「遺産」であるというメタファーを用いて、歴史的建築の「価値」を訴えた。



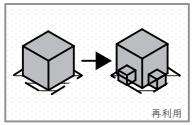
「文化財」は永久の若さを建築に求めるという態度ともいえるのではないだろうか。そして、それは建築に流れる時間を止めることとも言える。また「文化財」には二つの手法が存在する。一つが、建築を若返らせる行為である「修復」、次に若さを永遠に保つ「保存」の二つである。十六世紀に発達した「再開発」の「時間のリセット」は、時間的な概念で建築を見れば、二十世紀になり「リセットされた時間をゼロのままで止める」という「修復、保存」という概念まで昇華されたのである。

理想の状態で保存する

→ **共時的な建築の考え方**

再利用

十六世紀において発展した「再開発」、十九世紀から「再開発」に反発する「修復、保存」、では「再利用」はどのようなものか。「再利用」の概念は、十六世紀以前のはるか昔から存在していた。十六世紀以前にもまっさらな新築（開発）は多くあるが、既存建物があれば再利用はあたりまえであった。



「再利用」の定義は既存建物を改変しながら、再利用することである。つまり、既存建物の改変を必然的に伴うことである。既存建物の「再利用」においては、既存建物の一部が古いまま残り、一部は新しいものに改変される。つまり、現在のリノベーションやコンバージョンは改変を前提としている点においては「再利用」といえる。つまり、「再利用」は既存建築物に対して、改変して新たなものを作り出しており、敷地の時間軸という観点において、時間の流れの上にある建築である。

既存を改変し、再利用する

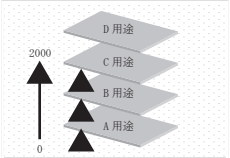
→ **通時的な建築の考え方**

04| 既存建築物への対応

再開発の文脈の中で、 建築を継承することは可能か

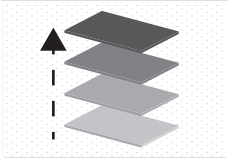
０２章にて、これまでに建築家が既存建築物に対して、行ってきた対応を共時態、通時態の時間的概念として考えてきた。ここで一つの疑問が浮かぶ、通時的な建築は再利用という文脈でしか生まれないのかということだ。レムコールハースのクロノカオスな状況に応えるため、保存、修復と再開発の文脈も含めながら、通時的な建築について考えてみる。通時的な建築（時の流れがある建築）として該当するものを現代再生型、歴史積層型、構造継承型の三種類に分類をし、二章の再開発、文化財、再利用の考え方と照らし合わせながら、再開発の文脈に位置しながらも通時的な建築を作ることは可能かという問いについて考える。

現代再生型



有名建築をそのまま再生するのではなく、要望に応えて現代的な機能や細部意匠を変更し、常態的に人の介在している建築を作る手法。

歴史積層型



元々そこにあった建築や都市の考え方を尊重しながら、書き換えるのではなく、歴史という地層のように新たに自分の建築を加える手法。

構造継承型

まちの持っている構造や建物の形式によって引き起こされているひとのふるまいを次の建築に継承していく手法。

構造継承型の可能性

現代再生型、歴史積層型の２つは再利用の文脈に、構造継承型は再開発と再利用の文脈にあたる。構造継承型は再開発でありながら、通時的な建築になる。再開発の目的をクリアしながら、まちの骨格や人のふるまいを誘発する仕掛けを採集し、それらを継承していく。これが保存と再開発という、対義語的に認識されている二つの関係を調停する方法となる。

	現代再生型	歴史積層型	構造継承型
再開発	×	×	○
保存	×	×	×
再利用	○	○	○

05| 結論

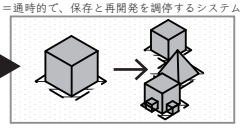
再開発と構造継承

再開発の目的クリア

まちの構造とひとのふるまい

・庇によるコミュニケーション
・湾曲や交差点による淀み
・一階部分に目線が向く
・両側を見渡せるような配置 etc

まちの構造と人のふるまいを継承した再開発計画
＝通時的で、保存と再開発を調停するシステム



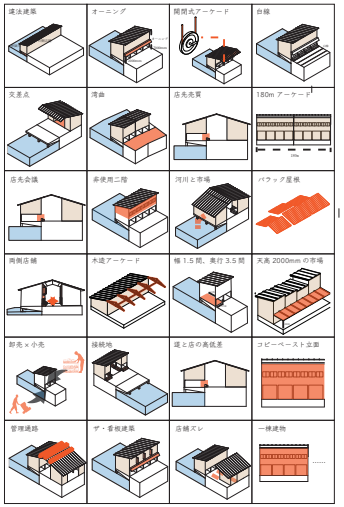
結論

まちの構造や場所の持つ建築形態を人のふるまいを誘発する仕掛けと捉え、ひとともノ、ひとともひとの関係構造を継承する

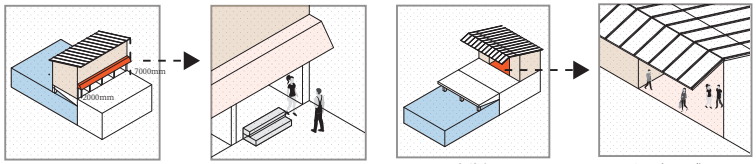
06| 設計方法

建築を人のふるまいを誘発する装置として継承を行う

人のふるまいと共にある装置の採集



関係性の継承

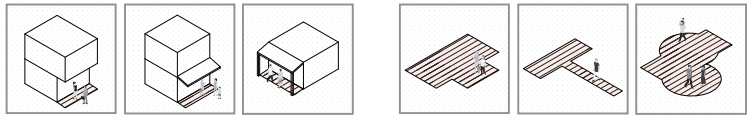


オーニング　店前コミュニケーション　交差点　人が淀む、集まる

庇やオーニングなどの屋根的な建築形式により、
ヒューマンスケールな空間を作り出すことで、
店主と客が話したりするふるまいが起きている

180m の短い市場の中でいくつか別の道に接続する
交差点的な建築形式により、市場客が
淀んだり、集まったりする人のふるまいがある

これらの形式はそのままに形態を変形することで関係性を継承、更新していく



07| 敷地情報

macro

福岡県北九州市小倉北区に位置する 100 年以上続く地元密着型市場。青果、鮮魚系を中心に 100 店舗以上の店が営まれる。

micro

メイン通り

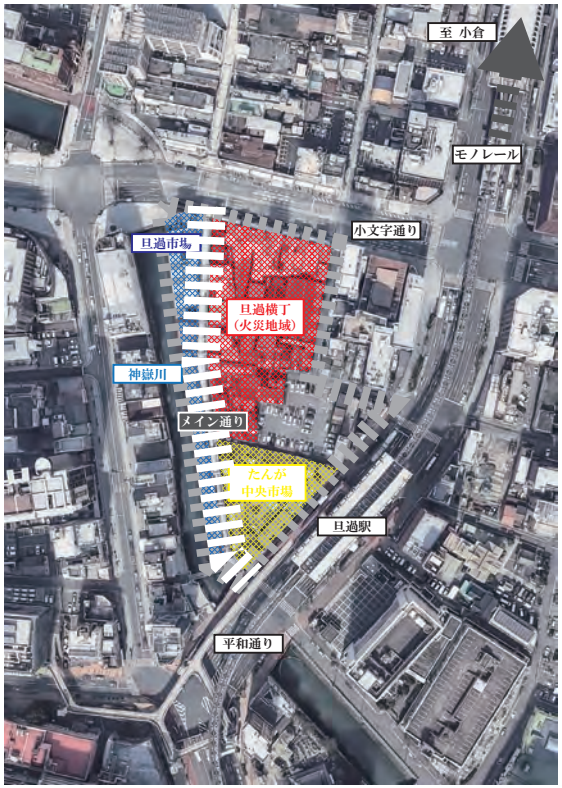
火災後の旦過市場

旦過市場店舗

たんが中央市場

河川上空市場

旦過市場の店構え



再開発の目的

災害面

神嶽川からの水害

木密市場による火災

経済面

出店店舗増加の要望

建築面

建物の老朽化，違法建築

提案

ハードな目的を達成しながら、
これまでの建築の遺伝子を残し
これからも愛着の持てる開発を目指す

再開発目的

災害面　経済面　建築面

風景採集

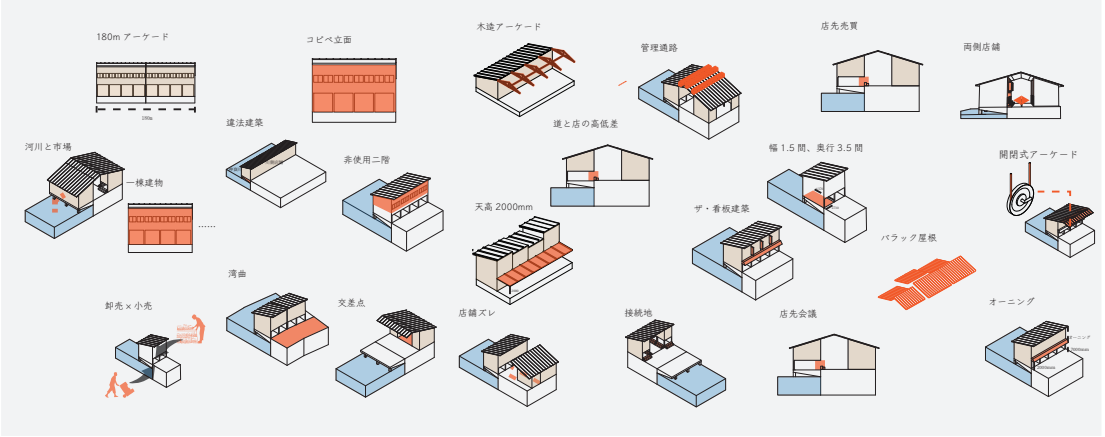
都市　建築　人

再開発の建築設計

08| 風景採集

09| 風景採集をスケールに分類

都市スケール　建築スケール　人スケール

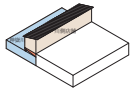


都市スケールの風景例

河川と市場

海でとれた鮮魚の売買から始まった旦過市場は神嶽川に背を向けた形で隣接

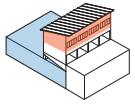
違法建築



全盛期に敷地に収まらなくなった市場は川に迫り出す形で建物が経ち営業している

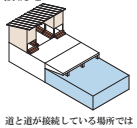
建築スケールの風景例

非使用二階



一階が店舗、二階が住居として建設されたが、現在は機能を失いほとんど使われていない

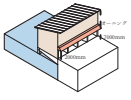
接続地



道と道が接続している場所では人が溢んだり、溢れ出しの多さが見える

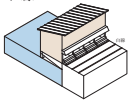
人スケールの風景例

オーニング



店の看板や建物の庇が道に迫り出すことで、店主と客のコミュニケーションを生んでいる

白線



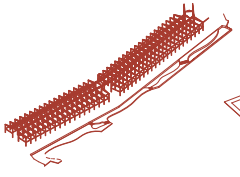
店の溢れ出しの許容する線が店から、1000mm の位置に引かれ、先にモノを出さない

10| 全体ダイアグラム

00, 現状

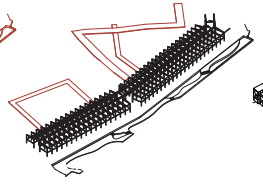
01, 建物面

現存アーケードをセットバックするように、元市場に公園を、内側に現存アーケードの継承と関係性が更新された新築のアーケードを作る



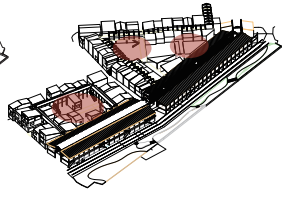
02, 経済面

通路長さができるだけ長くなるように、アーケード付きの通路を設置する



03, 防災面

通路に沿って分棟の建築ボリュームを建て、火災時のポケットとなる広場を設置する



11| 建築の継承と更新

大構造の継承　再開発への対応　関係性の更新

アーケード

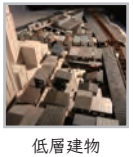
多くの関係性を作ってきた旦過市場における重要な風景であるアーケードを継承する

立体市場

アーケードを継承するにあたり、二階を使用した立体市場とすることで店舗増加に対応する

目隠しルーバー

従来の一階空間体験を残しつつ立体市場を挿入するため、二階は見えるけど見せない構成



低層建物

旦過市場の風景は低い建物から生まれてきた、この低層建物の形式は出来る限り継承する

立体市場

低層で成り立たせるため、非使用の 2,3 階を立体市場として開き、中低層で店舗増加に対応

二面ファサード

1 階は道路側、2 階は立体アーケードよりアクセスを可能にすることで二面でファサードを作り、新たな関係

大構造の継承　再開発への対応　関係性の更新

ストリート

旦過市場は道から多くの関係性を作り出してきた、この道性を構造として継承する

火災ポケット

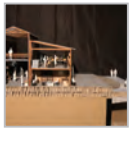
道を作るために、火災時の延焼を防止する場所も必要となる広場的な活用もできるポケットを作る

淀み空間

道とポケットの交わりは、旦過市場における淀み空間を創出。形態変形し淀む体験を更新する

アーケード

多くの関係性を作ってきた旦過市場における重要な風景であるアーケードを継承する



セットバック

違法建築となっている部分をセットバックさせ、継承と更新をしたアーケードを新築する

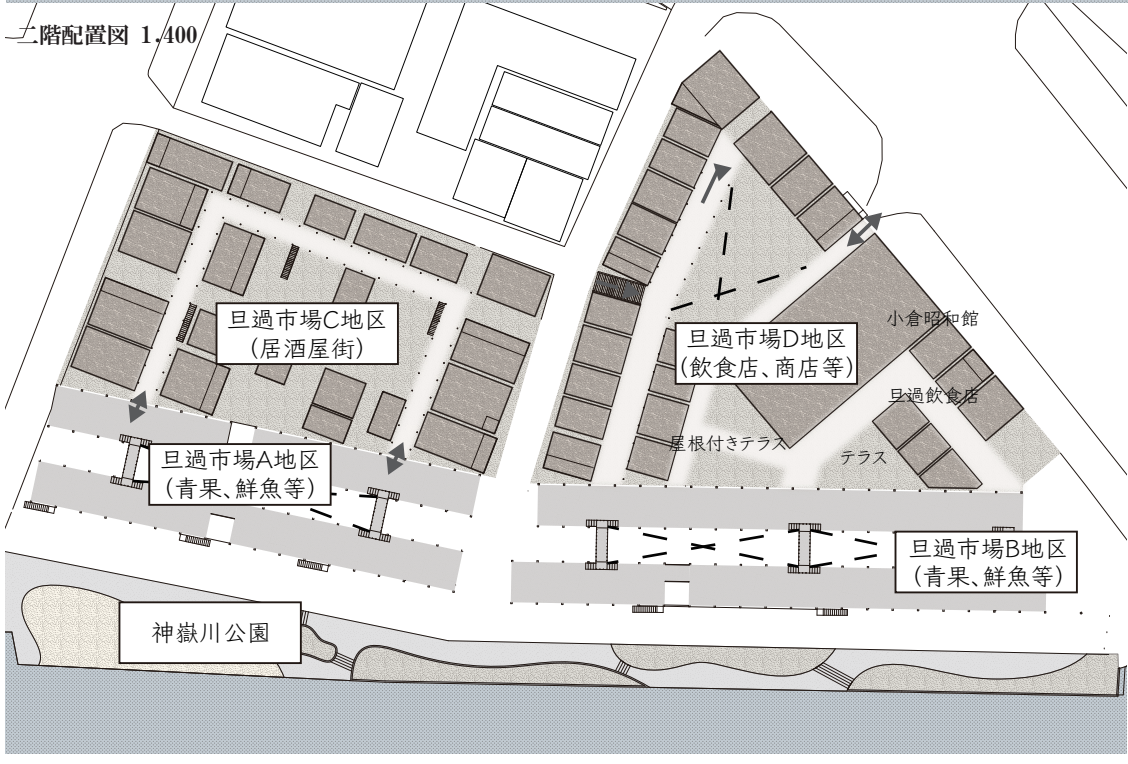
元市場の広場化

セットバック部分を公園として活用水害のネガティブな印象を更新しより親しみのある公園として新たな関係形成

12| 全体配置図

一階配置図 1.400

二階配置図 1.400



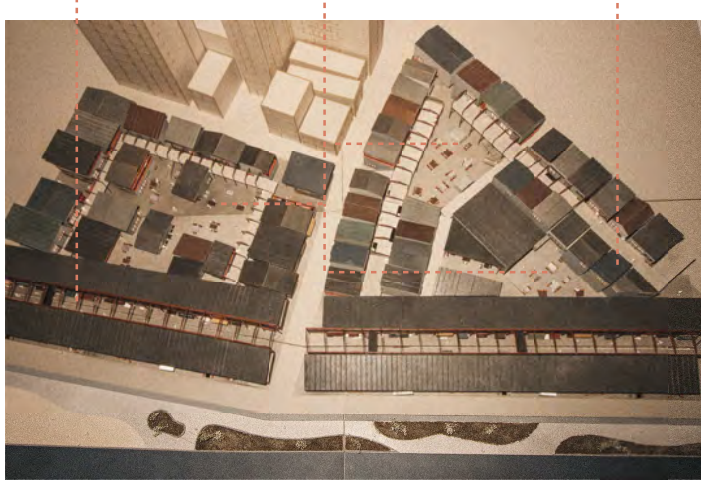
13| 全体計画

都市スケール

180m の市場
180m の絶妙な長さの市場はこのまちに住む人の原風景だ。このメイン通りの都市構造を継承し、全体の計画を成り立つ。

火災時のポケット
火災が燃え広がらないよう、火災時のポケットとなる場所を作っている。ここは通常時は広場として使われるようになる。

旦過駅との接続
新市場では観光客も呼び込むことを目指すため、北九州モノレールの駅である旦過駅と立体市場として接続する。



建築スケール

木造アーケード
新市場では観光客も呼び込むことを目指すため、北九州モノレールの駅である旦過駅と立体市場として接続する。

立体市場
一階店舗は道路側に、二階店舗は広場側に開口を取ることで、一建物で２店舗が店を開くようにできるようになっている。

階高が低い空間
立体市場である通路下は、雨天時の広場スペースとしてやヒューマンスケールな空間として機能する。

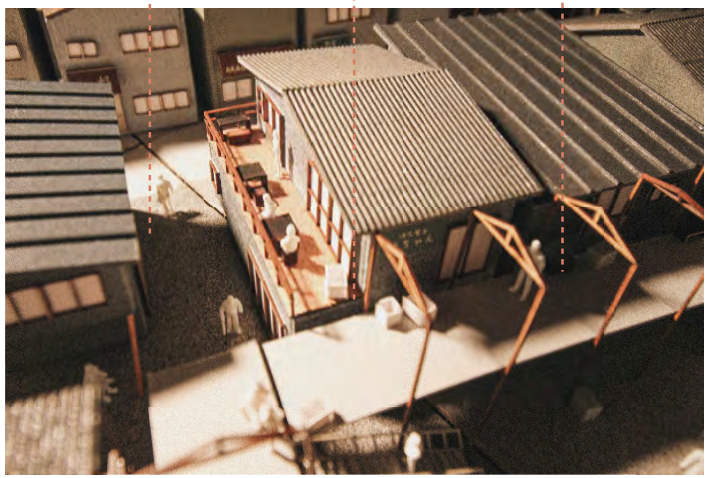
バラック屋根
旧市場が持っていた猥雑性を引き出すため、火災ポケットを作りながら分棟にし、猥雑感を創出する。

人スケール

路地
旧市場が持っていた猥雑性を引き出すため、火災ポケットを作りながら分棟にし、猥雑感を創出する。

溢れ出し
旧市場が持っていた猥雑性を引き出すため、火災ポケットを作りながら分棟にし、猥雑感を創出する。

交差点による淀み
旧市場が持っていた猥雑性を引き出すため、火災ポケットを作りながら分棟にし、猥雑感を創出する。



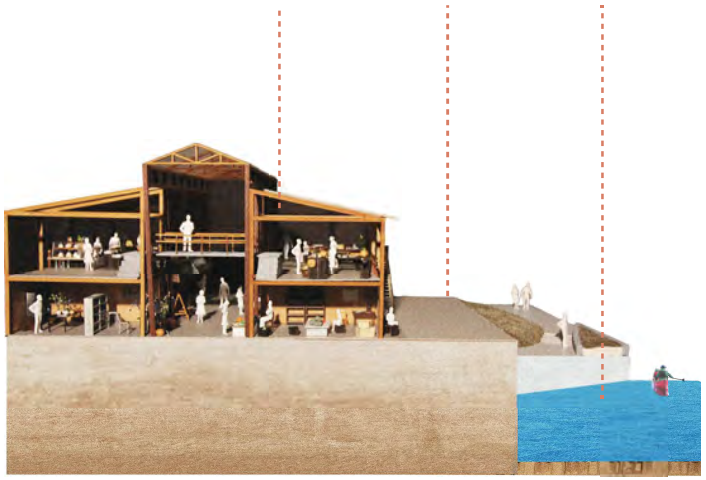
14| メインアーケード計画

都市スケール

市場のセットバック
違法建築であった河川上空市場を、岸側にセットバックする。元々あった溢れ出しの自線空間などを残して、人が休める空間に転換した。

元市場の公園化
市場の成り立ちである神嶽川に背を向けていた市場をセットバックして出来た場所を公園にすることで水害の根源ではなく、親しみの

神嶽川の護岸工事
水害が起きていた神嶽川を護岸工事をし、水深を 2-3m であったものを 5m まで深くすることで水害を防止する。



建築スケール

3.5 間 ×2間
旧市場で 3.5 間 ×1.5 間であった一区画を、間口を広げることで多くの営業業態が入れるようにする。（市場からの要望）

排煙，換気開口
旧市場は火災が起きたときの排煙がなく、火災が燃え広がった。換気もしつつ、緊急時には排煙洗としても機能する。

木造アーケード
旧市場の木造アーケード踏襲。架構を強く見せず下に目線が行くように一般的なハウトラスを採用し、継承を図る。

スリガラス
青果や鮮魚があるため、直射日光は当てられないが、日光を取り入れたいためスリガラスを使い、市場に光を落とす。

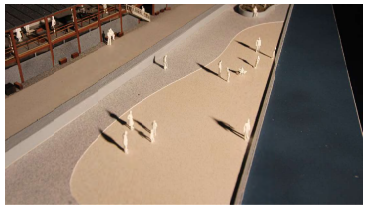
立体市場
出店店舗増加の要望から、使用していなかった２階を立体市場として使うことで、市場に垂直的な動きを作り出す。

人スケール

溢れ出し許容白線
店先から 1m までというルールで溢れ出しが行われてきた。新市場にも新たに線を引くことでこれを踏襲し、ふるまいを主む。

目隠しルーバー
メイン通りを歩く人は一階店舗に目を向けるふるまいがあった。立体市場でこのふるまいを踏襲するため、２階は見えるけど見せないよう目隠しルーバーを設置した。

両側店舗の可視化
旧市場では通の狭さから、両側の店舗が視界に入るふるまいがあった。通の狭さや店構えにルールを設け、これを踏襲する。

看板下空間での会話
店に入らず店先で話す光景を旦過市場の賑わいの要因だ。これを作るために、二階空間のオフセットや看板などで人スケールな空間を創出した。

15| 模型写真